［調査報告］

大学生による関係人口受入支援組織の構築に関する実証研究
―これからの青森ワーケーションを考察する―

Study of the Support Organization for Related Population by the University Student
―Consideration of Aomori-Workation―

竹内　紀人
TAKEUCHI Norito

青森中央学院大学経営法学部　教授

はじめに

本稿は、2023 度青森学術文化振興財団の助成事業に採択された「大学生による関係人口受入支援組織の構築に関する実証研究事業」の報告書である。本事業は、大学生が「関係人口」の受入支援組織を形成し、行政その他の団体と連携して地域の関係人口増加に貢献することを最終目的とする。

初年度は、ワーケーション[1]参加者との交流プログラムを自ら企画・実施することにより、企画運営力の涵養や参加者との直接的な関係性構築を中心的な目標として掲げた。本事業の実施により、大学生が地域の魅力を再認識し、シビックプライドが醸成され、彼らの定住志向や将来に向けた地域貢献意欲に繋がる効果が大きかった。

2023 年度事業の報告を進めながら、今後の青森ワーケーション[2]の方向性等を展望し、さらには大学生による関係人口受入支援組織の構築に関する次なるステップについても検討してみたい。

---

[1] ワーケーション：Work（仕事）と Vacation（休暇）を組み合わせた造語。 テレワーク等を活用し、普段の職場や自宅とは異なる場所で仕事をしつつ、自分の時間も過ごすこと。
（国土交通省観光庁）https://www.mlit.go.jp/kankocho/workation-bleisure（2024 年 2 月 17 日参照）

[2] 青森ワーケーション：後述のワーケーション先進地である新潟県妙高市で地域の特色を生かした取り組みを「妙高ワーケーション」と名付けていることから、青森県の特色あるワーケーションを目指す意味合いで用いる筆者の造語。ちなみに、青森市では、一般的な work × vacation ではなく、work × local communication｛造語…仕事（リモートワーク）をしながら、地方でがんばる地域住民や団体などと交流し、つながり、関係人口や移住者へと発展していくことを目的とした移住体験｝を、カタカナ表記の「アオモリ・ワーケーション」と命名し取り組んでいる。＃アオモリワーケーション　https://aomoriworkation.hp.peraichi.com/　（2024 年 2 月 17 日参照）

1. 事業の概要

1-1. 県内ニーズと対象地域の選定

青森県内の各市町村では、人口減少が一段と進む中、移住定住促進のための各種事業を行っているが、マンパワーの不足などから移住希望者・検討者に対する受入態勢が十分であるとは言えない。2022 年度に東青地域移住・交流サポート協議会からの委託で、今回の支援組織の母体である竹内ゼミの学生が蓬田村におけるワーケーションアテンド事業を試行した際に、学生等の若手人財が関われるニーズが高いのではないかと考えた。また、こうした事業を単発で行うのでは効果が限定的であるため、継続して活動できる学生の組織化が必要であることを認識した。ニーズは県内全域にあるとみられるが、効果的な実証研究事業を指向するため、実施場所は、大学の本拠地である青森市を中心とした東青地域で展開することとした。東青地域の町村部は特に人口減少が厳しい地域でもあり、その点からもサポートの需要は高いとみられる。

1-2. 事業内容

申請した事業内容は以下のとおりであった。

① 4 ～ 5 月にサポート団体を組織する。経営法学部学生を中心にチーム編成を行い、担当地域の視察や座学など学修を重ねながら、プログラム検討を進める。資機材の購入・管理、現地実証・テストを徐々に行う。

② 6 ～翌年 1 月に東青地域移住・交流サポート協議会と連携し、ワーケーションアテンドを実践する。実施場所は各町村のアウトドアをメインとしながら、要望に合わせ大学構内での交流会等も想定し、5 回程度の対応を目安とする。

③ 学生と教員によるワーケーション先進地視察・ヒアリングを実施し、ワーケーションに関する理解を深め、今後のプログラム組成等に活用する。

④ 10 月に開催予定の同地区市町村長会議で中間発表を行う。

⑤ 1 ～ 2 月に公開講座兼最終報告会を開催して事業完了とする。

1-3. 事業実施により見込まれる効果

地元の大学生が自ら地域の魅力と地域の課題を学修し、青森市やその周辺市町村に興味を持ってくれたワーケーション参加者に対し、地域の案内や懇談など、交流を深めることで、直接的に関係人口を増加させる窓口となることができる。この点に関し、彼らの持っている「若さ」は非常に大切な要素である。また、学生はやがて卒業の時を迎えるが、こうした活動が持続可能な組織として行われるならば、支援活動の継続性が担保される。また、本事業を通じて地元学生が地域の良さを改めて見つめなおし、定住する、もしくは県外で就職しても将来的に戻ってきて地域貢献したいと思えるシビックプライドの高揚も期待できる。すなわち、本事業の効果は、関係人口構築支援の組織化とキャリア教育的要素の相乗効果で、地域創生に寄与するものである。

1-4. 連係機関との役割分担

以下の通り、関係者の皆さまのご協力を得ながら、事業を進めることとなった。

(1)　青森市、蓬田村、外ヶ浜町、今別町、平内町、の 5 市町村:事業実施の各市町村には、ワーケーション事業自体での連携はもちろんのこと、学生グループの事前学修に向けた視察や座学のセッティングについて、関係各企業・団体等との調整をお願いすることとなった。

(2)　東青地域移住・交流サポート協議会：ワーケーション実施に関連し、ワーケーション参加者との連絡調整、資機材の取り扱い等を含む運営指導などを依頼した。広報業務も担当していただいた。

(3)　学校法人青森田中学園：大学を統括する法人として、大学以外の設置校との連携、交流会や公開講座兼報告会の会場提供等を依頼することとなった。

2. 事業の経過と成果

2-1. サポート団体の形成

2-1-1.「移住支援サークル」として認可

2023 年 4 月 12 日以降、青森中央学院大学経営法学部・竹内ゼミに所属する 3 年生 9 名をメンバーとしたサークルを「移住支援サークル」名で申請し、学内の新設サークルとして認可された。

命名理由は、ワーケーションアテンド事業にとどまらない活動を企図したためである。構想は、本サークルを一連の活動の母体としながら、徐々にゼミ外会員、下級生会員の確保、将来的には学校法人傘下の短大等からの会員募集や他大学との連携などにもつなげていきたいというものである。

2-1-2.「移住支援サークル」結成初年度の課題

限定的な時間の中で実際の活動を効率的に進めるうえでは、母体となった竹内 3 年ゼミの本科時間を有効に使いながら、関係団体とのコンセンサスを作り上げ、メンバーの共通認識の下で進めていくことが非常に大切であった。その点からは、学年が違うだけでも新メンバーを巻き込んでいくことは困難であり、例えばサークルの初期メンバーが、主体的に 2 年生竹内ゼミ生と協働することさえも、簡単にはいかない状況であった。この点に関しては、初年度ということもあり、2 年生ゼミは 2 年生ゼミで、ある程度は教員主導型でゼミ活動と並行しながら、各種の学修活動の中で地域への理解を深めていく準備段階にとどまった。

初年度なので、サークル活動の成果が出ていない状況で新メンバーを引き付ける魅力がないという根本的な問題もあった。次年度以降は、徐々にゼミレベルの活動色を軽減し、本来的なサークルとしての活動に切り替えていくことが課題となろう。

2-2. ワーケーションアテンドの実践

2-2-1. 主な事前学修、準備について

2023 年 4 月～　2 年ゼミ（10 名所属）、3 年ゼミ（9 名所属）では、それぞれ、青森県内町村部（主に東青地域）を対象とした地域学について、RESAS や各種ネット情報等を用いながら座学で実施した。

2023 年 5 月 17 日　現地案内付きで、今別町視察会実施。8：50-16：40（大学バス利用、3 年生サークルメンバー 6 名参加）

2023 年 5 月 24 日　「逆参勤交代」論で有名な、松田 智生氏（三菱総合研究所 未来共創本部 主席研究員）を招き、ワーケーション勉強会実施。（9 名参加）

2023 年 6 月 6 日　5 市町村連絡協議会から、青森市を除く 3 町 1 村の「あおもり親子ワーケーション」に関するスケジュールが届いたので、4 町村で最低 1 回は実施できるよう、ワーケーション日程の重複や授業日との関連を調整した。7/16（日）外ヶ浜町、7/23（日）平内町、8/20（日）蓬田村でそれぞれランチ交流、今別町は 9/2-3（土日）、9/9-10（土日）の 1 泊 2 日のアテンドで実施することを決定し、協議会へ返答した。

2023 年 6 月 7 日　サークル室の利用許可が下りたので、アウトドア用品の収納、所有備品類の確認、記録を行った。（9 名）

2023 年 6 月 28 日　上磯地域に共通する主要食材をテーマに、モヤヒルズの BBQ コーナーで、アウトドア料理作成～提供の試行を企画していたところ、青森市を訪れているクリエイターのアテンド実践に急遽変更となり、第 1 回ワーケーション支援となった。

2023 年 7 月 12 日　今別町親子ワーケーションに向け、今別町地域プロジェクトマネージャー周布氏をお迎えし、打合せを実施。（8 名）

2023 年 7 月 19 日　蓬田村日帰り親子ワーケーション（黒滝での流しそうめん）実施に向け、蓬田村企画調整課清水氏とリモート打合せ。

2023 年 10 月 10 日　2 年ゼミメンバーで乗用車分乗により、青森市浅虫～平内町大島周辺の観光資源視察、ならびに平内町住宅エリアの街並みの実調を行った。（10 名参加：12：10 ～ 16：00）

2023 年 10 月 31 日　2 年ゼミで改めてワーケーションで平内町を訪れた方々のもてなしをイメージしたアウトドア料理を検討し、前日の荷物積み込み、当日の買い物、セッティング、調理等の試行を、モヤヒルズ BBQ コーナーで実施した。（10 名参加：前日～当日午前中準備、当日は 12：05 ～ 16：00）

2-2-2. ワーケーションアテンド実績

【実績】

(1)　アウトドア料理試作会兼青森市来訪者 3 名に係るランチミーティング

実施内容：　上磯地域（今別町、外ヶ浜町、蓬田村）特産品を生かしたメニューの試作及び、効率的な作業、アテンド対象者との協働をイメージし、段取りや役割分担の確認を行う。

青森市へのワーケーション来訪者 3 名とランチ交流会を実施する。

実施日時：　2023 年 6 月 28 日水曜日　10：30 ～ 17：40（実質 12：00 ～ 16：00）

場　　所：　モヤヒルズグリーンシーズン BBQ ガーデン

参 加 者：　ワーケーション来訪者 3 名

移住者支援サークルメンバー 9 名（竹内ゼミ 3 年生）＋教員 1 名

青森市連携推進課、地域おこし協力隊員 3 名

スケジュール：　10：30　第 1 班（2 ～ 3 限目授業無しメンバー）食材等買い出しを経て現地へ。

12：00　担当教員と第 1 班が現地で合流。料理及びミーティングに向けた設営、ならびに調理開始。

12：45 ～ 14：00　ワーケーション来訪者 3 名との交流会実施。

14:30　第 2 班(3 限目まで授業があるメンバー)大学出発、現地で合流。

15：00 ～ 16：00　試作会・試食会継続。

16：00 ～ 17：40 ～　終了、現地片付け～帰路、用具等片付け。解散。

所　　見：　準備ならびに調理関連の段取りはスムーズに確認できた。急遽、アテンド本番となったことについても、地域、仕事、当日のメニューから発した「食」にまつわる話題などで、スムーズな交流ができた。

(2)　蓬田村との連携、「親子ワーケーション」屋外アクティビティ「黒滝散策」のサポート

実施内容：　蓬田村が募集した自然体験メインの「親子ワーケーション」のサポートをする。①　蓬田村の山深い場所にある落差 11 ｍの「黒滝」への山歩き、沢歩きをサポートする。

②「黒滝」の清流で、「流しそうめん」をするため、機材、食材を運び込む。

③　竹竿の設営や調理を手伝い、親子との交流を深める。

実施日時：　2023 年 8 月 20 日（日）　8：20 ～ 17：20（9 時間・実働 8 時間）

場　　所：　蓬田村ふるさと総合センター～黒滝

参 加 者：　ワーケーション来訪者 4 名夫婦、子二人（8 歳、4 歳）

蓬田村職員：企画政策課　3 名

移住者支援サークルメンバー 4 名（竹内ゼミ 3 年生）＋教員 1 名

具体的活動内容・スケジュール

スケジュール：　8：20　大学７号館前集合

8：50　車分乗で蓬田村へ出発

9：30　蓬田村ふるさと総合センター正面到着～　あいさつ、出発準備等

10：00　村公用車３台に乗り合いで黒滝へ出発

10：30　駐車スペースで下車し徒歩に切り替え
流しそうめん用の長尺竹､脚立､調理用ミネラルウォーター等運搬

11：40　黒滝到着（昼食準備）

12：00　昼食（流しそうめん）

14：00　黒滝出発

15：00　駐車場到着、公用車乗り換え

15：30　蓬田村ふるさと総合センター到着
長靴洗浄等、事後片付け、記念撮影

16：30　蓬田村出発　　17：20　大学７号館前到着、解散

所　　見：　長く重い荷物を分担し、小さな子供たちの安全も確保しながら、しっかりとサポートができた。村職員によると、本来「黒滝」散策は地元の生徒達でも小学校高学年以上のメニューであるそうだ。今回はここでしかできない自然体験として試行してみたとのこと。沢に降りる道で４歳の子が泣き出す場面などもあったが、結果的には親子ともどもかけがえのない体験になったと思う。私たちにも得難い経験であった。

写真 2-2-2-1.　流しそうめん（筆者撮影）

写真 2-2-2-2.　蓬田村「黒　　滝」（筆者撮影）

(3)　今別町との連携、「海峡の家ほろづき」をベースにした「親子ワーケーション」のサポート

実施内容：　今別町が募集した「親子ワーケーション」で親子の希望に即したサポートをする。

① 青森市の観光から戻ってきた親子に、夕方のアクティビティとして、ホタテ釣りと花火を楽しませる。

② ご当地食材を用いたアウトドア料理と翌朝の朝食を振る舞う。

③ 2日目に準備されているご当地アクティビティに合流し、家族と交流する。

実施日時： 2023年9月2日（土） 12：00～22：00（10時間・実働9時間）
2023年9月3日（日） 06：00～15：00（9時間・実働8時間）

場　　所： 今別町 「海峡の家　ほろづき」

参 加 者： ワーケーション来訪者4名夫婦、子二人（11歳、8歳）
今別町地域プロジェクトマネージャー　1名
移住者支援サークルメンバー（竹内ゼミ3年生）4名（日帰り）、2名（宿泊）＋教員1名（宿泊）

スケジュール：

9月2日土曜日（1日目）

12:00～12:15	大学2号館前集合、アウトドア関連備品類を車に積み込み
12:15～13:00	蓬田村「村の駅よもっと」で活ホタテ購入、滅菌水調達
13:00～13:30	外ヶ浜町　MAEDA蟹田店で食材購入
14:00～15:00	今別町 「海峡の家　ほろづき」到着～休憩
15:00～17:30	夕食準備、ホタテ釣り（アトラクション）準備
17:30～20:30	夕食会、ホタテ釣り遊び、花火
20:30～22:00	日帰り組は帰路へ、宿泊組はテーブル等片付け、皿洗い

9月３日日曜日（２日目）

6:00～ 7:30	朝食準備、BBQコンロ片付け
7:30～ 8:30	朝食
8:30～10:00	食堂片付け、厨房片付け、皿洗い
9:00～	お客様は「本気の磯遊び」へ出発
10:30～12:00	「本気の磯遊び」途中合流で、学生も実体験
12:00～13:00	休憩時間
13:00～14:30	今別～大学　帰路
14:30～15:00	備品類片付け後解散

所　　見： アクティビティとご当地食材を活用したメニュー設定の検討は、２日間にわたるアテンドということで、念入りに検討がなされた。ホタテ釣りを楽しんでもらうための道具作りや新鮮なホタテと海水の調達、あるいは、今別町

の食材を用いた夕朝食のメニュー作りなど、蓬田村の案件とは違う難しさがあったが、親子ともども非常に喜んでいただき、達成感が高かった。

写真 2-2-2-3. いまべつサーモン、イノシシソーセージなどを含むバーベキューメニュー。(筆者撮影)

写真 2-2-2-4. ホタテ釣りが大好評。(筆者撮影)

【ワーケーションアテンド小括】

当方では事業計画に則り、各自治体 1 回以上の支援実施を目論み、綿密にスケジュールを組成した。しかしながら、外ヶ浜町では、おだいばオートビレッジでの大規模イベントの中で、町として独自対応することが決まっていたため、また、平内町でも今年度のプランについては、地元の委託先を確定していたため、学生の支援は不要という連絡があり、それぞれキャンセルになった。また、1 泊 2 日の支援要請が 9 月に 2 週続いていた今別町においても、来訪者の都合により、後半の予定がすべてキャンセルとなったため、結果的に、青森市、蓬田村での日帰りアテンドが各 1 回、今別町での 1 泊 2 日コースが 1 回の計 3 回の対応で終了した。今年度のワーケーションアテンド事業を振り返ると、結果的に 3 回の対応でも人繰りを含め、相当に忙しかった。特に 10 月以降は、追加のワーケーション対応や学園での交流会実施の打診があっても、他の活動との兼ね合いで、事実上対応できなかったことを考えると、3 回の実績でも充分であったと考えている。

これは、メンバーを増やし、組織が拡大すれば解決できるという単純な問題ではない。昨年来さまざまな活動を共にしてきた気心の知れたメンバーでも、3 回の対応で非常に繁忙を極めたということは、今後の対応力増強を考える上でも、非常に重要な実証実験の成果と考える。

さまざまな相手方の事情により出動回数が予定を下回ったため、事業計画の変更申請に至ったことは事実だが、自前で対応できている自治体が少なくないことなど、ワーケーションの中のバケーションアテンドに限ってみれば、必ずしも、当初考えていたほど学生アテンドの需要が高くなかったことを冷静に捉えることも必要である。また、学生が地域を思い、意欲的に取り組むことは本事業の重要な要素だが、基本的に休日でなければこうした活動に対応できない学生のスケ

ジュール上の限界も、適切に把握する必要があると改めて感じた。

2-3. 先進地視察（妙高ワーケーションを中心に）

2-3-1. 視察の概要

実施目的：「妙高ワーケーション」の展開で著名な新潟県妙高市の取り組みについて、ハード、ソフトの両面から学び取る。

自然環境を活用したワーケーションや移住促進について、信越地域における考え方や取り組みを学修し、青森県における活用策のヒントを得る。

実施日程：2023 年 8 月 23 日（水）～ 25 日（金）（2 泊 3 日）

参 加 者：竹内紀人（教員）、高橋智矢、黒澤加奈（移住支援サークルメンバー）計３名

訪 問 先：① 妙高市役所

② 上越妙高駅前「フルサット」（㈱北信越地域資源研究所）

③ MYOKO BASE CAMP

④ 妙高ワーケーションセンター

⑤ 長野経済研究所

2-3-2. 妙高市役所　企画政策課　ヒアリング

テ ー マ：「妙高ワーケーション」への取り組み経緯と基本的な考え方について。

日　　時：8 月 23 日水曜日　15：00-16：30

対 応 者：企画政策課　副参事　　政策調整グループ係長　岸本　学　氏

政策調整グループ主査　今井秀幸　氏

政策調整グループ主事　丸山大樹　氏

ヒアリング概要：

- 妙高市は第 3 次妙高市総合計画の中で、人口減少問題の対応として関係人口創出、拡大を解決策の一つとして位置付けている。
- そのために仕事＋観光による地方への人の流れを創出し地方創生に繋げたい。
- ワーケーションは大きく分けて個人型ワーケーションと企業型ワーケーションがあり、妙高市には両方のワーケーション事業の実証事例がある。
- 市としては観光の要素が強く、一度きりになりやすい個人型ワーケーションよりも企業型ワーケーションを強化していく方針である。
- 関係人口の先にある移住人口の増加、持続可能な社会の創造が将来的な目標である。そのため、官民共生をキーワードに挙げ、行政主導から民間主導へシフトチェンジする方法を模索している。

写真 2-3-2-1.　妙高市役所応接室にて、企画政策課説明とそれに基づくヒアリング。(筆者撮影)

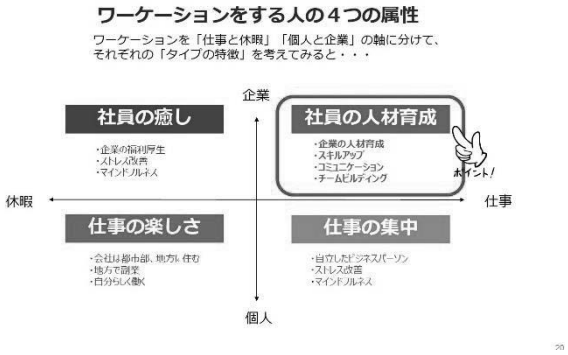

図 2-3-2-2.　「ワーケーションをする人の４つの属性」(出所：妙高市・訪問時配布資料・妙高市許諾)

所　　見：　行政がしっかりと「企業と個人」「仕事と休暇」のマトリックス（図 2-3-2-2 参照)に則り、ワーケーションに対する理解を深めたうえで、ワーケーションの誘致や、ハード、ソフト両面で受け入れ環境を整備することができていることがうかがわれた。

一方、東京から新幹線で２時間弱という時間距離に対し、３時間を要する青森はやはり首都圏からの集客という視点ではハンディを負っていると言わざるを得ない。

2-3-3.「フルサット」視察、ヒアリング

テーマ1.：　フルサット見学。フルサットは、北陸新幹線開業時、何もなかった上越妙高駅前に、平原氏がコンテナを利用し、昔ながらの雁木を新感覚で再現した通路で連結して造った商業施設。おいしい、たのしい、カワイイ、カッコイイなど・・・フルサトをぎゅっと凝縮した商業施設がコンセプトである。

テーマ2.：　民間観光関連事業者の視点による、妙高ワーケーションの現在とこれから。

日　　時：　8 月 24 日木曜日　9：00-10：00

対 応 者：　株式会社　北信越地域資源研究所　代表取締役　平原　匡　氏

ヒアリング概要：

- MYOKO BASE CAMP　は、テレワーク研修交流施設として整備したので、当初のレギュレーションでは地元の人たちの交流に利用してもらう予定はなかったようだ。
- 指定管理者の地元 DMO が困惑した。行政のスタンスと直接の事業者との間に施設の目的に関するギャップが存在したのではないか。
- 究極の行政の目的は「地域課題の解決」なので、糸魚川、上越、妙高のエリアで県が課題と考えていることをもっと可視化して、それを民間で解決していく形を作っていく事が大切だということで、今は交流面での活用にも柔軟な対応をしている模

様である。

- そうした面を考えると、ワーケーションに関する今の施策は中途半端である。
- 首都圏のコンサルファームが資本も含めて「妙高ワーケーション」に群がってきている状況があり、交通整理が必要だと思う。事業の入口はできたが、例えば、どうやって企業の教育スタイルを動かしていくのか。民間を巻き込み、もう 1 歩 2 歩踏み込んだ実証実験を重ねて答えを出していかなくてはいけない。
- 今は、アテンドの仕組み作りを進めているが、最終的にはそこは民間に任せ、行政がやるべきことは、プロモーションしか残らないという姿が望ましい。

写真 2-3-3-1.　上越妙高駅前「フルサット」（筆者撮影）

写真 2-3-3-2.「フルサット」前で平原社長と。（筆者撮影）

所　　見：「ワーケーション」がこれからどうなるかという問いに対し、「出張と同じくらい普通の言葉になるだろう。あとは、観光交流という枠組みの中で、民間側が強めていけたらいいのではないか」との回答が印象的であった。つまり、会社が普通にワーケーションの費用を出せるようになれば、事業として自走の段階に入るだろうということだ。常に行政といろいろな意味で対峙しながら、地域の課題解決に取り組んでおられる平原氏ならではの「ワーケーション論」だと感じた。また、平原氏は新たな民間プロジェクトの動きと関連し、地域金融機関の動きも重要だと話していた。当地では、例えば上越市のクラフトビール案件に、新潟の第四銀行ではなく、長野の八十二銀行が参画したそうだ。地域づくりと地域金融機関の姿勢という視点から非常に興味深い話であった。

2-3-4. 「MYOKO BASE CAMP」視察、ヒアリング

テーマ 1.：「妙高市テレワーク研修交流施設 MYOKO BASE CAMP」の見学。妙高市がワーケーションの拠点として整備した施設である。
https://youtu.be/lW6ulLweh6g?t=30（参照日 2024 年 2 月 27 日）

テーマ２.：　運営者（指定管理者）の視点による、施設の利用可能性、課題、今後の展開に関するヒアリング。

日　　時：　8 月 24 日木曜日　13：00-14：30
対 応 者：　一般社団法人妙高ツーリズムマネジメント　事業部係長　宇野みのり　氏
施設概要：

- 本施設の立地は、国立公園の森に溶け込むように、池の平温泉の中にある最高のワークスペースである。
- 1 階エントランスを入ると、左側にだれでも利用可能なコミュニティスペースがあり、「NAGOMI CAFE」が併設されている。
- 防音扉を開けると、1 階の右側は、好みの場所でワークが可能なコワーキングスペースであり、デスク、チェアの組み合わせで 10 名以上のミーティング等も可能である。
- 2 階のコワーキングスペースもさまざまなデスクやいすが準備され、一角には 1 か月単位で貸し出されるワーク用個室も 2 部屋ある。
- 2 階の会議スペース A、B、C、は、利用人数がそれぞれ 8 人、4 人、2 人のリアル・オンライン兼用の会議スペース。「Zoom Rooms」が標準搭載された機器があらかじめ配置されているため、カメラ、マイク、スピーカーを用意する手間なく、即、オンライン会議が実施できる。
- 2 階のシェアオフィススペースは 1 席、1 カ月単位での貸し出しを行っている。

ヒアリング概要：

- 国立公園内という立地、冬はウィンタースポーツも楽しめる妙高山は心底リフレッシュできるワークスペースである。
- 海外の方々にも知られている土地柄なので、インバウンド・ワーケーションも PR していきたい。
- 施設の認知度が高まり、ワーケーション需要は着実に高まってきているが、施設ができたことで、地域の催事や会議に利用したい声が非常に多い。
- いつでもワーケーションだけで予約が埋まっているわけではないので、指定管理者としては、地域での利活用もどんどん推奨したいところだが、行政サイドは、当初いい顔をしなかった。
- 最近では、地域の拠点としての利活用についても、市の理解が進んできて、地域の方々にも利用していただきやすくなってきた。施設整備の目的に照らし、やむをえない部分もあるとは思うが、最終的な目的は地域活性化であるはずなので、利用目的の制限というのはどうなのか。

所　　見：　ただただ、素晴らしい施設である。ぜひとも、ワークをするために改めて訪問し、Zoom Rooms　を備えた会議室で、その機能を自分で確かめてみたいと思った。指定管理者の方が、私見と断りながらも、地域住民による当該施設の利活用について、戸惑いを隠さなかった点は、類似の施設をつくることがあれば、どこでも同じ悩みが生じることであろう。

　いずれにせよ、首都圏からの距離感は違うものの、青森県でワーケーショ

ンを推進するにあたってもいろいろ参考にできる視点がたくさんあったと思う。最新鋭の設備を有する同様の施設を青森県にもいますぐ作りましょうということではなく、既存のコワーキングスペースの活用や、空き家をリノベーションしたワークスペースの設営などを検討する際に参考にすればいいと考えた。

写真 2-3-4-1.　「MYOKO BASE CAMP」正面。（筆者撮影）

写真 2-3-4-2.　「MYOKO BASE CAMP」
会議スペース A（8 名用）もう一つテーブルあり。
（筆者撮影）

2-3-5.「妙高ワーケーションセンター」ヒアリング

テ ー マ：　「妙高ワーケーション」の具体的な商品設計、基本的な考え方や課題等についてのヒアリング。

日　　時：　8 月 24 日木曜日　15：00-16：30

対 応 者：　一般社団法人妙高市グリーンツーリズム推進協議会

専務理事事務局長　館野智光　氏

ワーケーションコーディネーター　竹内義晴　氏

ヒアリング概要：

- ワーケーションに対しては、当初怪しさを感じ、違和感があった。日本能率協会との出会いで仕事面からの役割が認められそうなので、企業目線で考えることも可能ではと考えるようになった。
- 妙高ワーケーションの HP の図をまとめた理由は、そこがスタート。考え直すと個人の部分にも意味が見いだせる気がしてきた。
- 観光の延長でしかないなら、強いもの（北海道、沖縄）に負ける。「この地域のここだけの学び」という視点なら、合点がいく。
- 当初から企業目線で企業研修のようなものを考えた。それなら、不便な場所への二次交通もバスをチャーターすればよいという話になる。
- 企業の課題解決であれば企業はお金を出す。一方、個人も仕事時間に遊びたいわけではない。いい環境で仕事がしたいという欲求はある。
- 企業向けではコロナ禍を経て、合宿的なものの価値が上がってきた。

- 親子ワーケーションは親と子が一緒に遊ぶのではなく、親が仕事をしているときに、プロが子どもを預かって体験をさせるのが本筋。親は仕事に集中できる。そういう親子ワーケーションは我々くらいだと思う。
- 今まで観光と言っていたものに、どうやって学びの要素を付加して、可視化できるかが勝負。
- 観光素材というよりは、人である。コーディネーターがあれこれ考えるだけでは実現できない。あらゆる分野の地元のプロが必要である。だから人に会いに行く。
- 今は「妙高ワーケーションセンター」としての顔を持っているが、組織は、「妙高市グリーンツーリズム推進協議会」である。
- 移住促進のための長期滞在をイメージした「クラインガルテン妙高[3]」がこの一帯にあるが、個人のワーケーションにどう使ってもらえるかを検討し、市は短期利用制度を追加した。
- ワーケーションに関し、協議会は実行部隊としての役割を担う。当地の観光を個人客で潤わせるのは DMO のしごとである。どちらかと言えば企業のためになるものを考えていくことになる。
- ラーニング型の企画で、企業が金を出してもメリットを感じるプランを検討している。
- 親子ワーケーションも人件費はともかく、実費はしっかりといただいている。行政による参加者への補填はない。

所　　見：「ワーケーションって観光でしょ」という素朴な問いから市当局の要請に対応してきた実働部隊の考え方がとてもよく理解できた。事業として成立させるワーケーションは、企業寄りでなくてはならないことを軸に置きながら、その中で、個人への効用も再認識することができた。その場で竹内義晴氏にワーケーションセミナーへの講師登壇の内諾をいただいたことも含め、実り多い訪問であった。

写真 2-3-5-1.　竹内氏が所用で途中退席した後も、舘野専務から様々なお話を聴くことができた。（筆者撮影）

写真 2-3-5-2.　隣接地の「クラインガルテン妙高」（筆者撮影）

[3] クラインガルテン妙高：ラウベ（滞在施設）付きの貸し農園。

2-3-6.「一般財団法人　長野経済研究所」ヒアリング

テ ー マ：　コロナ禍を挟んでの長野県の関係人口関連施策の動向。
「おためしナガノ」の活用による県外 IT 事業者の県内移住推進。

日　　時：　8 月 25 日金曜日　13：00-14：30

応 対 者：　一般財団法人長野経済研究所　専務理事　三井　哲　氏
調査部部長代理兼上席研究員　粂井裕至　氏
調査部　研究員　鶴田貴子　氏

ヒアリング概要：

【田舎暮らし「楽園信州」推進協議会（事務局:県企画振興部信州暮らし推進課）について】

- 信州暮らしの魅力、強みは、①「信州」のブランド力とプライスレスな多様な価値の提供と、②三大都市圏からのアクセス、である。
- オール信州（県、市町村、民間）による取り組みの重点的な方向性は①働く場としての信州の展開、②「つながり人口」にフォーカス、等である
- 長野県への移住者数は 2021 年度で 2,960 人、これを 4,500 まで引き上げていく目標。
- 長野県の社会増減数は 2018, 19 年に年間△ 3 ～ 4 千人だったのが 20 年は△ 2,100 人に減少数が縮小、21 年は△ 577 人にとどまった。
- 「長野県空き家利活用アドバイザー」の設置・運用による、「住む場所づくり」への注力。

【「おためしナガノ」[4] 活用による県外 IT 事業者の県内移住推進について】

- 2021 年度のおためしナガノは 15 市町村で 24 組 (36 名) が参加し、うち 19 組が年度末時点で事業継続を希望した。
- 完全な移住には至らなくとも、県内に事業拠点を残す、県外との 2 拠点生活を維持する、などの参加者が多かった。
- 制度を始めた 15 年度以降の累計では、計 92 組 (156 名) が参加し、うち 62 組が参加年度末時点で県内での事業継続を希望していた。
- 過去の参加者の主なコメントとしては、「思ったより長野県内でのビジネスマッチングの機会が少なかった」、「約半年の期間の中でよいことも悪いことも含め、じっくり検討できたのが良かった」、「首都圏では自家用車は持たないのが普通なので、各市町村での移動手段等には、一段の配慮や支援が欲しい」、「半年くらいだと地域に根付くことは難しい」、「完全な移住を求められる制度ではないので、非常に利用しやすかった」など、さまざまな声があった。

---

[4] 「おためしナガノ」: 長野県が信州バレー構想の一環として、首都圏をはじめとする県外の IT 関係事業者に一定期間長野県に「おためし」で住んでもらい、事業を行う機会を提供する施策である。県がオフィス使用料や引っ越し代、交通費等を一人当たり最大 30 万円まで補助する。期間は実施年度の 8 月～ 2 月末までの 7 か月間で、最短 3 か月以上、月平均でおおむね 6 泊以上は県内で仕事をすることが条件。

写真 2-3-6-1.　長野経済研究所でのミーティング 1（筆者撮影）

写真 2-3-6-2.　長野経済研究所でのミーティング 2（筆者撮影）

所　　見：　首都圏だけでなく、中京圏や大阪圏とも容易にアクセスできる長野県ならではの移住関連に関する強みや積極的な施策展開は、かねてより注目していたが、本県にとっても、落ち着いた環境を求めている人や自然と触れ合いながら仕事を進めていきたい方々にアプローチするヒントがさまざまあると感じた。長野県においてもやはり大きなテーマは「働く場」であることに納得した。それにしても社会減が 1,000 人に満たない、つまり社会増減がほぼ均衡していると言って差し支えない点に長野県の強さを感じた。

2-4. ワーケーションセミナーの開催

妙高ワーケーション関連視察でお世話になった、一般社団法人妙高市グリーンツーリズム推進協議会　ワーケーションコーディネーター竹内義晴氏をメイン・スピーカーとしてお迎えし[5]、青森県におけるワーケーションのこれからを考えるため、本事業の総括としてのセミナーを開催した。

概要は以下の通りである。

テ ー マ：　ワーケーションセミナー「これからの青森ワーケーションを考える」

日　　時：　2024 年 1 月 19 日金曜日 10：30-12：00

会　　場：　青森中央学院大学学術交流会館　921 教室

対 象 者：　一般、観光団体関連団体・事業者等、自治体の移住・ワーケーション等担当者、青森中央学院大学「地域観光論」受講学生（3 年）

出席者は一般 21 名、学生 95 名の計 116 名であった。

写真 2-4．ワーケーションセミナー・リーフレット
（出所：青森中央学院大学地域マネジメント研究所）

2-4-1. 学生によるワーケーションアテンドの報告（10 分）

本報告書 2-2-2. で紹介した、蓬田村黒滝での親子ワーケーション日帰りアテンド、今別町「海峡の家ほろづき」での親子ワーケーションの 1 泊 2 日アテンドについて、動画素材やスライドを用い、それぞれの参加代表者が実施報告を行った。

---

[5] 竹内義晴氏略歴:1971 年生まれ。新潟県妙高市出身・在住。「これからの働き方・組織づくり」の専門家。実践家。「楽しくはたらく人・チームを増やす」が活動のテーマ。2020 年より、新潟県妙高市のワーケーションコーディネーターとして、ワーケーションをはじめ地域活性化の事業開発にも携わる。内閣府地方創生テレワークアワード「地方創生担当大臣賞」を受賞。そのほか、特定非営利活動法人しごとのみらい理事長。組織づくりやコミュニケーションの企業研修・講演に携わるほか、サイボウズ株式会社にてマーケティング・ブランディングに携わる複業家。複業、テレワーク、多拠点ワークなど、これからの仕事のあり方や働き方を実践している。

写真 2- 4 -1-1.　ワーケーション支援実績報告（蓬田村）
（筆者撮影）

写真 2- 4 -1-2.　ワーケーション支援実績報告（今別町）
（筆者撮影）

2-4-2.　学生による信越地域視察報告（10 分）

本報告書 2-3. で紹介した訪問内容のうち、2-3-2. 妙高市役所　企画政策課ヒアリングと、2-3-4.「MYOKO BASE CAMP」視察、ヒアリングの内容を中心に、視察参加者 2 名が報告した。

写真 2- 4 -2-1.　先進地視察報告 1　（筆者撮影）

写真 2- 4 -2-2.　先進地視察報告 2　（筆者撮影）

2-4-3．基調講演（竹内義晴　氏　55 分）

講演内容の要旨は以下の通り。

- 2017 年から平日を新潟で 3 日、東京で 2 日過ごすフルリモートの仕事を続けている。2018 年頃からテレワークで何か交流を作りたいと考えていた。
- 「地方に行けばクリエイティヴになれる、アイデアが出る」は、おかしい。
- ワーケーションに引っ掛かりを感じながらも妙高市の事業に関わっていく中、日本能率協会マネジメントセンターの方が話した、「その土地ならではの学び」ということなら、ワーケーションの意義を見出せると感じた。
- 2020 年 6 月に、グリーンツーリズム推進協議会が、ワーケーションセンターとし

ての機能を持つことになり、「ハートランド妙高」という協議会の施設にセンターが設置された。当時はコロナ禍で、人の動きが止まった中で、始動した。

写真 2- 4 -3-1.　基調講演中の竹内義晴氏（筆者撮影）

- 企業と個人、仕事と休暇の枠組みで考えると、当初は企業×仕事の組み合わせの「社員の人材育成」にしか価値を見出せなかった。
- 妙高には森林セラピーというストレス改善プログラムがあるが、こうした癒し効果は、企業×休暇の組み合わせに該当するのではと考えた。
- プログラマー時代に心がつらくなった経験があり、その際に農業体験で心が癒されたことがある。
- また、サイボウズ社がコロナ禍で強制テレワークになったとき、「観光やアクティビティは要らない、ただ私は集中して仕事がしたいだけである」という社内の書き込みがあり、個人×仕事の組み合わせの理屈ができた。
- ワーケーションはそういうことではないと考えていた個人×休暇だけが残った。考えてみたら、自分らしく働くとか、地方で働くという概念で「仕事の楽しさ」と表現できるようになった。ここで、私にとっての「ワーケーション」がようやく出来上がった。
- 企業×仕事は業務としてのワーケーションであり、人材育成、研修、合宿などで、険しい本格的な山に入ったり、そば打ちをしたりしながら、チームビルディングなどに役立つ。
- 個人×仕事は、多様な働き方としてのワーケーションと位置付けられる。これをしやすくする場所として、本来長期滞在を目的としたクラインガルテンに、短期貸し制度を付加した。
- 個人×休暇のプログラムとしては、親子ワーケーションが挙げられる。親子ワーケーションは親子が一緒に遊んで、ちょっとだけ仕事をするものが主流である。妙高の親子ワーケーションは、子どもを預かり、自然体験をさせている間に、親が本気で仕事をできる、というスタイルである。
- 2020 年に観光回復の手段として休暇分散型のワーケーションが喧伝されたため、ワーケーションの一般的イメージは、ノマドワーカー、旅をしながら働く、観光・アクティビティ＋仕事、景色のいいリゾート地で仕事、といったもので形成されるようになった。
- 自分がそれに参加する人になったとき、会社や同僚の理解を得られるか、旅費はど

うする、労務管理は、何かあったときの労災は、等の問題が生じるはずである。

- 普通のビジネスパーソンが胸を張って業務として参加出来なければ、ワーケーションではない。
- ただ、最近では、個人の働き方も一段と多様化している。ワーケーションの一過性のブームは終わり、より本質的なことが求められるようになっていると考える。
- ワーケーションは「多様な働き方、学び方」の視点で捉えられるべきである。
- 何のためにワーケーションをするのかという目的、しっかりと仕事ができる環境が大切だ。
- 地域が陥りやすい盲点として、地域側の視点からプログラムを組むため、良かれと思って観光案件を 1 日のスケジュールに詰め込む傾向があるが、それは働く者の立場からすると困る。
- しっかり仕事ができる､仕事をしていると企業に知らせることができるようにして、その上で時間外や休日にコミュニケートできる時間をつくるのが良い。
- ワーケーションに限らないが、物事を企画する際には、ターゲットを絞り、実現するバリューを明確にする、つまり、「誰に何と言ってほしいのか」を考えることが大切である。
- ワーケーションがこれからどうなるのかにはそんなに興味がない｡人口減少の中で、ひとつの地域だけでいろいろなことをカバーしていくのは､もはや辛すぎる状況だ。そういうことを他の地域とカバーしあえる関係を創っていく事が大切だと思う。

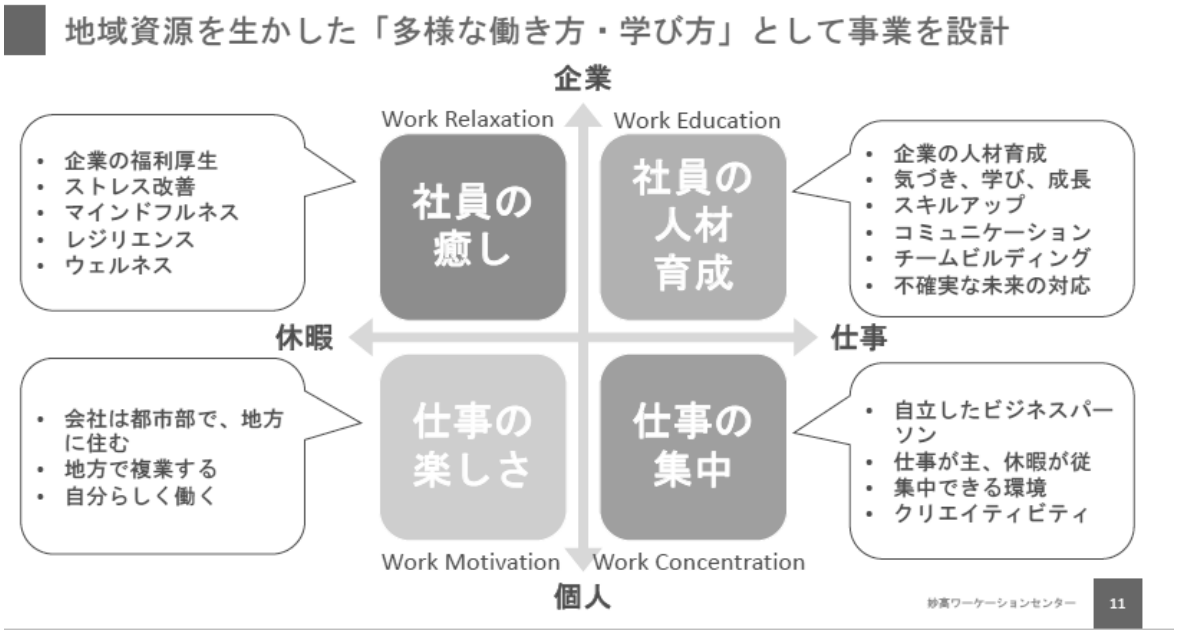

図 2-4 -3-2.　ワーケーションにおける仕事-休暇と企業-個人の関係　（竹内義晴氏　講演資料より　本人許諾）

2-4-4. クロストーク（竹内義晴　氏　×　竹内紀人　15 分）

時間の制約等もあり、テーブルセッティング等は行わず、竹内紀人の感想、質問に竹内義晴氏が答える形式で進めた。

紀人 Q　親子ワーケーションの話で、青少年自然の家の方々が活躍されたお話しでしたが、子供向けのプログラムをしっかり企画し、実行するのは現実にはかなり大変なのでは？

義晴 A　そうした公的施設はいろいろな体験メニューに精通した方々が多数いる。どちらかと言えば、受け身の対応が主体の施設だが、親子ワーケーションの企画を持ち込んだら、「それ、いいですね」とすぐに反応してくれた職員が一人いた。そういう流れで、今では「もっと私たちにできる事はないですか」という形になっている。自然の家だけでなく、さまざまなプロが「〇〇のために、やりたいのです」と言ってくれることはありがたい。

紀人 Q　ご自身のメンタルの話もされていましたが、竹内さんの活動には常に「共感」とか、「何のために」というワードが登場します。働き方や組織作りの専門家として改めてひとことお願いします。

義晴 A　世の中では、働いているとやはり理不尽なこともあるので、日中の過ごし方で最も大きな比重を占める仕事の時間が少しでも楽しいと感じられたらいいと思う。

紀人 Q　他にはない体験や学びというお話しがありました。竹内さんの知っている「青森県」で、これは使えるのではと思うコンテンツはありますか。

義晴 A　まだ、青森のことに詳しくないですが、昨夜の食事会で参加者の一人がねぶたの紙を使ったスマホケースを見せてくれました。地域ならではのとてつもない情熱やはかなさのストーリーがあるものは、とてもいいと思います。

写真 2- 4 -4-1.　竹内義晴氏と竹内紀人のクロストーク
（筆者撮影）

3. 2023 年度事業のまとめ

3-1. 事業実績のまとめ

(1)　サポート団体の組織化

4 月早々に「移住支援サークルを結成し、地域に関する学修を進めながら、プログラム検討を進め、資機材の購入・管理を経て、アテンド本番に向けた現地実証ができた。

(2)　東青地域移住・交流サポート協議会との連携による、ワーケーションアテンド

当初、5 市町村に対し各 1 回の計 5 回実施を目指したが、調整した日程に対する先方の意向等もあり、実施回数は 1 市 1 町 1 村の 3 回にとどまった。学生の活動可能な時間が限られている中では精一杯対応できた。自治体独自の対応が確立している部分もあり、必ずしも、いつも学生がいなくてはならないわけではないことが判明した。

(3) ワーケーション先進地視察・ヒアリングの実施

新潟県妙高市では、妙高ワーケーションのハード・ソフト両面の取り組み状況や、現地視察から多くのことを学ぶことができた。また、長野県長野市の長野経済研究所では、民間地域シンクタンクの視点から、3 大都市圏との近隣性を最大限活用して移住政策を進めている長野県における民間企業のダイナミズムを知ることができた。

(4) 東青地区市町村長会議における中間発表

発表の要請がなかったので実施せず。

(5) 公開講座兼最終報告会の開催

竹内義晴氏をメインスピーカーに迎え、ワーケーションアテンドや先進地視察の学生報告と併せ、充実した公開講座兼最終報告会が実施できた。

3-2. 今後の課題

研究の目的と持続性に照らし、次年度を展望した課題を検討する。

サポート団体の組織化はスムーズに遂行されたが、年次が上がり卒業することで、メンバーが常に流動的とならざるを得ない学生の組織を、いつでも稼働できる組織にすることは、非常に困難であることを改めて認識した。支援要請を受け、日々刻々その準備を限られた時間で進めていくには、同じ経営法学部で年次がひとつ違うだけでも、さまざまな問題が生じる。特定ゼミの活動がサークル活動に変化した点で一歩前進ではあるが、そこから先のメンバー強化は、今後も大きな課題である。

これまで対応してきたワーケーションアテンドは、休日や長期休暇を活用した、来訪者のバケーション部分に対する支援である。システムとして要望に応じた対応がある程度できるようになった事は今年度事業の成果と言える。また、本来的な事業目的ともいえる、大学生のシビックプライド醸成についても、一連のワーケーションアテンドへの関わりの中で、地域の視察や学修を重ねたことにより、大いに地元愛が育まれたことは彼らの日常会話の変化からも明白である。

こうした中、「これからの青森ワーケーション」がどうあるべきかという問いに対しては、竹内義晴氏の講演内容が、いくつかの示唆を与えてくれた。

ひとつめは、ワーケーションへの取り組みが観光の競争に陥ってはならないということである。青森市の担当者から聞くところでは、最近のワーケーション参加者には、本気で仕事をしたい人々が多いということだが、それでも県内市町村のワーケーション受入の目玉は、ご当地の山であり、海であり、そこから生まれた素材を活かしたご当地グルメ、すなわち観光そのものである。私たちの実施したアテンドも、当地のコンテンツとグルメを

前面に出したプランであった。休日のバケーションアテンド内容としてはそれで間違いではないが、詰め込み過ぎがないかを含め、今一度考え直す必要があろう。竹内氏が言う通り、素晴らしい海もおいしいごちそうも、日本中にあふれている。そこで競争するということが目的ではないはずである。

二つめは、その延長線上の考え方だが、「その地域ならではの体験や学び」が必要だということである。これは究極的には、都会の人が知らないような過疎地の困難な状況の中だからこそ存在するコンテンツや頑張っている人、あるいは、例えば3.11後の復興に関連したコンテンツや、復興に向けた困難を乗り越えてきた人、そういう「コト」や「ヒト」に出会い、コミュニケーションをとりながら、癒しや刺激を受けることができるプログラムが必要だということである。青森県において、どんなコンテンツが考えられるのか。それらを体験し、そのキーパーソンと出会う意味は何なのかを洗い出さなくては「青森ワーケーション」は完成に近づかない。

そして、三つめに大切なことは、逆説的だが、「青森ワーケーション」をどうするかが目的となってはならないということだ。そもそも、ワーケーションを普及させたい理由は、日本の中でトップクラスの人口減少県である青森県に関係性を持った人々を増やして、実際に青森県のいろいろな仕事を助けてほしいという考え方にある。

だからこそ、私たちの研究事業名のキーワードは「関係人口受入支援」なのである。次年度は、ワーケーション対応を見直しつつ、ある程度の距離感をもって第２段階に移していく事が必要である。

ワーケーションアテンドの要請が来たらもちろん真剣に対応するとしても、違った形での貢献が必要であろう。そのためには、地域のために関係性を持ってくれる人々の仕事に関するアプローチを強めていく必要がある。仕事ができる場所や環境の構築などに、大学生がどういう関わり方ができるのかを考えていく必要があるだろう。

先進地視察とワーケーションセミナーで培った見識をもとに、さらに「大学生による関係人口受入支援組織の構築に関する実証研究事業」を進めていきたい。

以上

本調査報告書は、2023度青森学術文化振興財団の助成事業に採択された「大学生による関係人口受入支援組織の構築に関する実証研究事業」の報告書である。

参考文献

国土交通省観光庁「新たな旅のスタイルワーケーション＆ブレジャー」
https://www.mlit.go.jp/kankocho/workation-bleisure/ （2024 年 2 月 17 日参照）
青森市「＃アオモリワーケーション」https://aomoriworkation.hp.peraichi.com/
（2024 年 2 月 17 日参照）
妙高市「妙高ワーケーション」https://myoko-workation.jp/ （2024 年 2 月 17 日参照）
㈱北信越地域資源研究所「フルサット HP」https://furusatto.com/companyoutline/
（2024 年 2 月 17 日参照）
（一社）妙高ツーリズムマネジメント「MYOKO BASE CAMP」
https://myokobasecamp.jp/ （2024 年 2 月 17 日参照）
（一社）妙高ツーリズムマネジメント「Myokobasecamp conceptmovie」
https://www.youtube.com/watch?v=lW6ulLweh6g&t=30s （2024 年 2 月 17 日参照）
妙高市グリーンツーリズム推進協議会「妙高グリーンツーリズム推進協議会 HP」
https://myoko-gt.com/ （2024 年 2 月 17 日参照）
長野県「おためしナガノ HP」https://www.pref.nagano.lg.jp/ritti-it/otameshi/index.html
（2024 年 2 月 17 日参照）
青森中央学院大学「ワーケーションセミナー『これからの青森ワーケーションを考える』を開催しました」https://www.aomoricgu.ac.jp/news/ （2024 年 2 月 17 日参照）